令和５年６月１７日（土）

信濃教育会　研究発表会　東北信Ａ（軽井沢町立　軽井沢西部小学校）

佐伯胖所長　開会の挨拶

おはようございます。今日は、75 期の研究員の皆さんの発表会ですね。入所されてからずっとコロナの中、非常にやりにくい環境で研究を続けてこられました。今日は発表会ということ で、非常に望ましいことだと思います。そして、会場を提供してくださった西部小学校の先生方には本当にお世話になります。よろしくお願いいたします。

最初に少しご挨拶するわけですけれども、6 月 3 日に研究所で、スプリングセミナーというのがありまして、その時話しましたことと繰り返しになっちゃうのですけれども、子どもを見るとはどういうことかということですね、そのことについてお話ししたいと思います。

見るっていう言葉ですけどもね。見るというのは、何か、 対象に目を向けて、焦点を当てて、いわゆる見つめるというような行為だと考えるとですね、これは実は見たいもの、見たいことしか見えないのですね。 そのことについては、村上陽一郎さんが、『近代科学を超えて』という著書の中で、フランスの科学捜査の研究所のスローガンで出てくる言葉を紹介しています。“目は、それが探し求めているもの以外は見ることができない。探し求めているものは元々心の中にあったものでしかない。”これは、予想とか期待とか、計画とかっていうことを先に考えて子どもを見てしまうと、それは、それに即したことしか見えないっていうことですね。それは本当に子どもを見ることにはならないということを最初に申し上げたわけです。 じゃあ、子どもの姿は本当にちゃんとわかるような見えそれは「見る」でなく「見える」のですね。見えるというよりも、見えてくるのです。子どものことが見えてくるっていうことが大事なのですが、その“見る”ということと“見える”ということは、これは動詞の態（voice）がちがう。「見る」というのは能動態ですね。「見る」と言ったら、視線を向けるとか、能動的な行為になりますね。ところが、「見える」というのは、これは能動態じゃないのです。じゃあどういうのかというと、これが中動態という、最近注目を浴びている動詞の態で、受動態、能動態に加えて中動態というのが動詞の態（voice）としてあるのです。中動態というのは、これは意図的な行為による動作じゃないのですね。例えば、眠るという動詞がありますね。眠るというのは、眠ろう眠ろうと思ったら眠れなくなっちゃうのですよ。却って。それと同じように、見よう見ようと思うと見えなくなっちゃうということですね。「見える」あるいは「見えてくる」っていうことは、能動的な構え、計画性とかですね、期待とか予想とか、そういうことから外れて、何かふと見える、子どもの姿がふと見えるっていうことが生まれなきゃならないのですね。その時、本当の子どもの姿が見えてくるわけです。そうしますと、そこでは、ねばならぬ・べきである、とかという、そういう目論見を 一旦捨てなきゃならない。あるいは、どういったことが望ましいかというようなことをあらかじめ想定して、それが見えるか見えないかということを考えたら、それは見えなくなっちゃうのです。そうじゃない。じゃあどうすればいいかというと、我々はそういう「見ようとする構え」を一旦捨てるということなのですね。 つまり、見ようと思うことを一旦やめて、何か子どもの世界に入り込んで、子供の活動の世界の中に自分が巻き込まれること。中動態の動詞というのはですね、巻き込まれることで主語に生じる、つまり、それによって見えてくる、そういうことなのです。そうしますと、それは、子どもが一体今どういうことを考えているのか、どういうことを見ようとしているのか、 どういうふうに生きようとしているのかという、子どもが生きようとしている姿の中に自分も一緒に入り込んでいくっていうことで初めて見えるのですね。そういったことで、見ようと思って見るっていうものではないということなのです。そうしますと、そこ

で必要なこととして、私はその講演の最後に申し上げた「sense of wonder」という言葉があるのですね。「sense of wonder」は、レイチェル・カーソンの有名な著書の題名ですけれども、 直訳すると「驚きの感性」ということになるわけですね。しかし、その「驚く」というのは、これは驚こうと思って驚くなんてことはありえないわけですね。これはやっぱり、さっき言いました中動態の動詞なんです。つまり、何か見えた時に、あっすごいなっていうことがわき起こってくる。そういうことがあの wonder ということですね。驚きの感性。でも、驚くっていうことは、それはこの驚きの「感性」と言っている以上は、「感じる」ことなのですね。感じることっていうことで物がわかってくる。頭で考えて分かることじゃなくて、感じてわかることですね。これはブルースリーの有名な言葉で、「Don't think .Just feel」って、感じろ、考えることじゃなくて、感じること。ブルースリーの言葉ですけども、その感覚なのですよ。つまり、何か考えるってことじゃなくて、感じ取るっていうことで、それは子ども見るっていうときにも、子どものものが見えてくるという感性ですね。それが sense of wonder だ。それは、想定外ということに心を開くこと。何かいつも自分が想定していないことが起こるかもしれないっていうことですね。想定外のことがいつでも起こるだろうということで、そのことが、やっぱりいつも「 面白い」っていうことが、何かいつもありうるぞっていうね、面白さということに対して、いつも、何か心の中で、何か面白さを求めているようなことですね、そういう感覚で、それは、何かきっと面白いことがあるだろうっていうね、そういった面白いことがあるかもしれないっていうことに感覚を開くわけですね。そうしますと、そういった感覚っていうのは、これは望ましい姿の望ましい態度っていうこととは全然違うわけですね。最近は非認知能力が大切だなんて言われてますけど、そういう望ましい、何か自主性とか主体性とかっていう、そういうものがあるといいって言われてますけど、 そういったことが大事だと言われているのはですね、実は教育勅語から始まっているのですよ。つまり、教育勅語っていうのは、あれ、全然悪いこと言っていませんよ。そりゃ、 安倍昭恵夫人が絶賛するだけあってですね、言っていることは全然悪いことじゃなく、すごくいいこと言っています。 今の望ましい姿だとか、あるいは、非認知能力として望ましいと言っていることと同じようなものなのですよ。でも、そういったことを掲げられるっていうこと自身が、実は本当に姿が見えなくなってしまうということなのですね。そういう風なことじゃなくて、何か想定外のことがいつも起こるかもしれないぞっていう思いを持って、子どもの姿をいつも興味深く、 面白いことってあるかもしれないぞということでもって見るっていうこと。そこにはいつも、 なぜなのだろう、どうしてなのだろう、と、What Why という疑問をいつでも心の中で描いていて、あっそうか、そういうことなのか、という見る側が常に何か新しい発見を期待して見ている、ということ。そういうときに、「見えてくる」のが「主体性」というものです。

今日の研修、発表会の中で、研修員の皆さんが、とても子どもたちの面白い姿を描いてくれると思いますが、 そういったことで、皆さん方も、あっそうなのだっていうので、想定外を発見する楽しみをぜひ味わっていただければと思います。今日はよろしくお願いします。